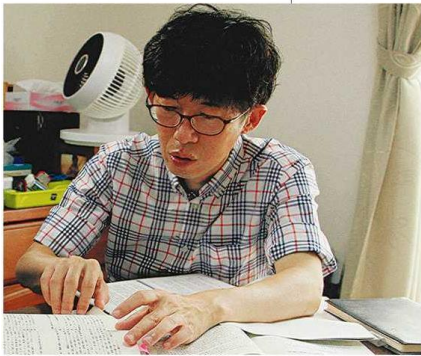


●男性の手紙を基に戦時中の足跡を調べ
愛知学院大・広中准教授



日中戦争帰還兵 沈黙の訳

戦後
78年

豊橋の男性細菌戦部隊と接点

日中戦争史が専門で、東三河の戦争体験者を調べる愛知学院大文学部の広中一准教授が、旧日本陸軍に召集された豊橋市の男性故人が戦時中に家族に宛てた手紙から、その足跡をたどった。戦後、子や孫たちに戦争について多くを語ろうとはせず、精神的な不調も続いた男性。残された文面から、ある特殊部隊との接点が浮かび上がった。（西山輝一）

愛知学院大・広中准教授 手紙を調査

「当地にきて一か月あまり、元気にて病理試験室に勤務しています」「市街は落ちております」。一九四〇（昭和十五年）年春、中国から日本の家族に宛てた手紙。戦地を思わせる緊迫感は感じられない。

男性は渥美郡（現・田原市）の農家に生まれ、二十歳だった三九年、豊橋に拠点を置く歩兵第一八連隊に入隊。広島の港から中国に渡り、衛生兵として南京の陸軍病院に派遣された。

四三年に船で日本に引き揚げ、従軍中に故郷に送った五十四通の手紙は自身で保管した。子や孫に存在を明かしたのは晩年になってから。六年前に九十七歳で亡くなった後、遺族が「本人の足跡を知りたい」と広中准教授の協力を得た。

四一年の手紙には「病院勤務は毎日雑仕事。努力はいためが気の仕事だ」とある。戦局の変

浙贛作戦 日本軍が1942年5月、中国浙江省と江西省にまたがって行った細菌戦や銃撃戦。きっかけは同年4月、東京や名古屋などの都市が米軍機の初空襲を受けた「ドリーツェル空襲」。日本軍の航空母艦をたつた米軍機の着陸地が浙江省だったことが分かり、日本軍は再発を防ぐため同省の飛行場や周りの軍事施設を破壊する作戦を実行。日中両軍や住民に多くの死傷者が出た。

た手紙に「予防接種に勤務している」とあることから、戦地での細菌の感染予防研究に関わった可能性がある。

男性はさらに「独立歩兵第一〇二大隊」に転属。浙贛作戦に参加した約八十の大隊の一つで、多くの死傷者を出した陸地での銃撃戦に参加した。

手紙に戦闘の様子を示す記述はなかった。帰郷後も、男性にとっては「戦争」は終わりでなかった。遺族によると、人が変わったように無気力になり、抑うつ状態が続いた。仕事も手に付かず、周囲から蔑視されることもあったが、ひとり沈黙を守った。

銃撃戦や細菌戦を伴う作戦に参加したことを知った遺族は「すべてが腑に落ちた」と語る。広中さんは「戦地から帰還した後も、一人一人の心に傷を負わせるのが戦争の実態だろう」と述べ、男性に生涯の沈黙を強いいた不条理を思いやった。